

# 社会科の主張

## 1 教科で育みたい人間像

人はだれでも社会の中で生きています。「人は一人では生きていけない」という言葉にもあるように、私たちは社会的存在であるといえます。人間同士のかかわりによって、文化や社会のしくみを生み出すこともあれば、ときには対立を生むこともあります。その対立には、日常の些細な対立から日本や世界全体を巻き込む対立まで幅広いものがありますが、共通するのは、正解を簡単に導き出せないことです。そのような世の中を生きていく子どもたちのために、社会科の教師は何ができるのでしょうか。

私たちは社会科を「社会的事象の追求を通して『社会の中でどのように生きるか』について考えをもつ教科」であると考えます。「社会」とは、家族や地域、国家、世界など、何らかのつながりをもった人々の集まりを指します。そして、「社会的事象」とは、「社会」における現在や過去の人々の営みのことを指します。このように、空間的にも時間的にもさまざまな枠組みの中にある社会的事象に触れ、そのよさや問題点、またはそれに携わるさまざまな人々の考えを吟味しながら、その事象を改めて見つめ直すことを、社会科の授業で実践しています。

このような社会の授業を経験した子どもは、「物事に対する答えが一つではないような気がしてきた」「自分の意見以外にもいろいろな考えがあり、それをふまえて一番理想的なものを探していくことが、社会に出た時に必要になると思った」と語り卒業していきました。「いろいろな考え」という表現からもわかるように、重視することや置かれた立場によって考えは異なるものです。しかし、「答えが一つではない」状況であっても、「一番理想的なもの」すなわち、一つの行動を選択しなければならない時があります。そのような決断をするためには、社会的事象に入り込んで自分の問題としてとらえるとともに、自分以外の人間が重視することやその人が置かれた立場を理解する必要があります。そのようにすることで、はじめて、そこにいるすべての人々にとって最善の結論を導き出せるのだと思います。

子どもたちが社会科の授業を通して、「自分にも何かできるかもしれない」「こんな社会にしていきたい」という思いや意思をもち、すべての人にとってよりよい社会にしていこうと行動する「社会を創る人」になっていくことを、私たちは願っています。

## 2 私たちが大切にしたいこと

社会的事象には安易に結論を導き出せない複雑さがあります。なぜなら、「社会」における人々の営みは、矛盾のない理論だけで成り立っているわけではないからです。ですから、その時その場所で生きている人々によって結論は異なるものになると考えられます。その複雑さを仲間とともに感じながら社会的事象について考えていった結果、新たな考えを生みだすときもあれば、先人たちと同じ結論を導き出すときもあることでしょう。つまり、社会科のおもしろさは、子どもたちがその時その場で簡単には結論を出すことができないことについて、自分たちなりに考えていくところにあると考えます。

そのおもしろさを子どもたちが味わうために、私たちは次のことを大切にしています。第一に、**社会像を自分の中に構築すること**です。社会的事象を自分のこととしてとらえ、自分の思いをもつことで、子どもたちは自分なりの社会像を構築し

ていくことでしょう。第二に、**社会の姿を仲間とともに創りあげること**です。それぞれが構築した社会像を伝え合い、最善の結論を探っていくことで、個々が構築した社会像を実際の世の中に近いものにしていくことでしょう。

子どもたちが社会的事象を自分の問題としてとらえるための手だてには、さまざまなものが考えられますが、今年度は「問い」にこだわって実践していきます。子どもたちの「なぜだろう？」という疑問が、社会的事象に入り込み自分の問題として考えるために必要不可欠であると考えました。子どもたちの中に「問い」を生み出すためにどのような手だてが有効なのか、どのように授業を構想すれば「問い」を活かすことができるのかを考えていきます。

子どもたちが社会とのつながりを感じ、社会科のおもしろさを味わいながら社会の姿を創っていくよう、授業を構想し、実践を重ねていきます。